Kwansei Gakuin University

新刊紹介

飯田収治編著　関西学院大学西洋史学研究室編

『西洋世界の歴史像を求めて』

関西学院大学出版会　2006年7月刊　374頁　3,900円

秋　田　宣　孝

本書は、関西学院大学大学院文学研究科に西洋史学専攻が設置され、50周年にあたる2004年に企画され、編纂された論集である。全体では17編の論考が掲載されている。本書に寄せられた論考が対象とする時代・地域は広範囲にわたるが、本書は単純に時代順・地域ごとに各論考を並べたものではなく、論考別のテーマに沿った5部構成となっているのが大きな特徴である。簡単ではあるが、以下で各部ごとに順を追って紹介していく。

まず、第1部は「史料読解から歴史像の彫刻へ」と題し、第1章の田中穂積「セレウコス朝期におけるティグリス河畔のセレウケイア ―古典文献の叙述を通して」は、ヘレニズム期のティグリス河畔のセレウケイアに関して、古典文献を手がかりにセレウコス朝下のセレウケイアの政治事情を中心に述べる。第2章の藤井信之「エジプトは『折れた葦』か？ ―前一千年紀のエジプト史再考に向けて」は、古代エジプト史研究の中でも衰退史観で占められていた前一千年紀というものを、同時代の激しく興亡を繰り返してきた古代オリエント・東地中海世界の中に位置づけ、前一千年期エジプトの再考する必要性を主張している。第3章、相野洋三「アヤ＝ソフィア博物館南階上廊におけるHenricus Dandoloの銘の刻まれた大理石版について」は、アヤ・ソフィアに残るエンリコ・ダンドロの大理石碑文をめぐって、従来伝えられてきた解釈を整理し、今なお不明なエンリコ・ダンドロ自身の墓所について迫ろうとしている。第4章、荒木康彦「小松済治の伝記史料の「批判的」検討 ―十九世紀後半の日独交渉史の研究のために」は、19世紀後半の日独交渉史において大きな役割を担った、小松済治の不明な部分が残る個人的研究に関して、彼の墓碑文にみられる「伝記史料」を他の断片的な一次史料などと比較することで批判的に検討し、小松済治の個人的研究の解明に努めている。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

次に、第2部「キリスト教世界の史的構図」において、第5章、梅田輝世「エルサレム王アマーリック一世のエジプト遠征」は、エルサレム王国第6代アマーリック1世のエジプト遠征について、エルサレムの大司祭を務めたティルのウィリアムの記録とアラブ史料を合わせて、事実関係について整理している。第6章、山本信太郎「イングランド宗教改革期の教区協会と協会巡察」は、教区が有した教会行政の要と考えられてきた協会巡察に関して、イングランド宗教改革期の教区協会側からの史料を用いて、教区協会が教会巡察をどのように受け止めていたかを考察している。第7章、赤阪俊一「カトリックと女性聖職者 ―開かれた議論のために」は、現代も続くカトリックでの女性聖職者拒否に関して、今後カトリックにおける女性の聖職参与に関する議論をより開かれたものにするために、カトリックに見られる女性聖職者拒否の論理を紹介している。

第3部「近世社会史研究の新しい切口」においては、第8章、阿河雄二郎「近世フランスにおける狩猟書の世界 ―デュ・フィユー『猟犬狩』を手がかりに」が、デュ・フィユーの『猟犬狩』を中心に近世フランスにおける狩猟の実態に迫り、王の狩猟に見られる宮廷儀礼の要素、王と臣下とのありようから、中近世フランスの政治文化の解明に向けた展望を試みる。第9章、佐保吉一「デンマークにおける土地緊縛制廃止(一七八八年)について」は、デンマーク史研究において、従来、直接的かつ具体的研究がなされてこなかった、デンマーク近代化の重要な一要素であるはずの土地緊縛廃止に関して、その具体的内容を検討し、その上でデンマーク史における位置づけを行っている。第10章、乳原孝「近世ロンドンの社会統制 ―貧民の道徳化をめぐって」は、近世ロンドンにおける安定追求の政策・制度のうち、浮浪者対策を含めた貧民政策を取り上げ、その貧民政策が道徳化を通しての社会制度であった点を論じ、その上でそうした社会統制に対するロンドン市民の反応を考察している。

第4部「歴史世界における政治と軍事」において、第11章、中谷功治「タグマの兵力をめぐる考察 ―中期ビザンツ帝国における「中央軍」」は、近衛連体の4つの騎兵タグマの兵力をめぐる議論を整理した上で、トレッドゴールドが導き出している騎兵連隊タグマの兵力に関する結論について修正の必要性を指摘し、「中央軍」としてのタグマの位置づけを行っている。第12章、山口悟「一九二〇年代イギリス海軍の極東防衛構想」は、戦間期のイギリス海軍「戦争覚書」を主要史料として、1920年代について考察を加え、当時イギリス海軍がとった極東防衛構想を妥当なものであったと評価している。第13章、八木希容子「戦間期ドイツの「国防軍参謀本部」構想に関する一考察」は、国防軍総司令部（ＯＫＷ）と陸軍総司令部（ＯＫＨ）の対立関係ついて、その性質と経過の考察を行い、その中でヒトラーの陸軍掌握につながる要因を明らか

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

にしようとしている。1880年代は大英帝国の防衛のために、イギリス陸軍は変革を迫れた時期であったが、第14章、根無喜一「ヘンリー・ブラッケンベリーとイギリス陸軍省情報部　一八八六年～一八九一年」は、特にイギリスにとって戦略環境が厳しくなる1880年代中頃以降の時期について、イギリス陸軍省情報部長のヘンリー・ブラッケンベリーを通して、情報部を中心としたイギリス陸軍内での変革の経緯を見ている。

最後に、第５部は「現代史像の陰影」とし、そのうち、第15章、飯田収治「ナチ強制収容所の「抑留者社会」　―近年の研究動向によせて」は、1990年代以降ようやく活発化していく「ナチ強制収容所」研究の動向を提示した上で、歴史家が歴史研究として「ナチ強制収容所」を捉える場合に生じる、「犠牲者の心情」への配慮という歴史家が現在も抱えるジレンマについて指摘している。第16章、爲雅雅代「初代連邦大統領テオドーア・ホイス　―二十世紀ドイツ社会に生きたある政治家の肖像」は、帝政期に生を受け、ワイマール共和国で活躍し、ナチスの支配下で生きた経験を持ち、第二次大戦敗戦後はドイツ連邦共和国初代大統領を務めたテオドーア・ホイスの肖像を追っている。第17章、高原秀介「ウッドロー・ウィルソン政権とシベリア出兵政策の変容　―第一次世界大戦終結前後を中心に」は、ウイルソン政権のシベリア出兵への対応をめぐり出兵参加国と米国との相互作用を提示した上で、対独戦争の遂行、対日封じ込め、革命政府への対応、民主勢力への側面支援という４つの政治目標が米国のシベリア出兵政策に占めた比重を検討し、この政策の意義について明らかにしようと試みている。

本書に掲載されている17編の論考は、関西学院大学西洋史学研究室の現役教員、ならびに関西学院大学西洋史学科を卒業・修了し、各研究分野で活躍している研究者から寄せられたものである。近年、日本の西洋史学研究が専門分野（地域、時代、テーマなど）ごとに細分化されたる傾向にある。その点は本書においても見受けられるのであるが、一方で本書は１つの研究室が50年という年月の間に研究の眼差しを向けた思考の広がり、言い換えるならば、関西学院大学西洋史学研究室の50年という伝統を物語っているともいえる。その意味において、本書はもちろん第一には学術書としての性格をもって出版されたものではあるが、本書の企画・編纂の目的が関西学院大学大学院文学研究科に西洋史学専攻が設置されて50周年を記念する事業であるため、冒頭の田中穂積氏の「西洋史学専攻開設五〇周年によせて」と、本書末の田中きく代氏の「あとがきにかえて」をあわせるならば、関西学院大学西洋史学研究室の過去から現在への50年史になっていることも付記しておきたい。

NII-Electronic Library Service